セカンドステージ

「生涯現役」自治体が支援

働く場探し 専用窓口でサポート

現役をいったん退いたシニアが地元で無理なく働ける場を探すのを手助けする自治体の「生涯現役窓口」の活動が目立つ。就労先だけでなく、ボランティアや趣味、健康づくりについてもまとめて情報が得られるワンストップサービスを展開するところもある。活動の現場を訪ねてみた。

9月上旬、千葉県柏市の複合施設で「学んで働く生涯現役 福祉のお仕事セミナー」が開かれた。講師の二瓶陽子さんは「週に2～3日、1日当たり4～5時間の就労が多い。ドライヤーで髪を乾かすなど資格不要の仕事もある」。28人の参加者に福祉分野の仕事やそのやりがいを語った。

セミナーは柏市生涯現役促進協議会が主催。同協議会は市や地域の関係団体で構成。JR柏駅近くのビルに置いた「かしわ生涯現役窓口」を通じ、主に55歳以上の市民に地元求人、ボランティアや学習活動、健康づくりに関する情報をワンストップで提供している。

協議会の白石博事業統括員によると、セミナーや窓口相談の結果、2016年10月から今年3月までの間に195人のシニアが仕事に就いた。その他の活動に参加したのも478人に上るという。

集まったシニアを前に福祉系職場の説明をする二瓶さん（9月、千葉県柏市内）

■地元で無理なく
■生きがいの場に

星野孝治さん（70）は19年8月から市内のクリエすずき建設でパートタイマーとして週2日働く。石油化学業界にいて68歳で一度引退していた。しかし「仕事を離れると物の考え方や行動範囲、視野が狭まる」と実感。未経験の分野で人とふれあう機会をもちたいと考え、偶然知った協議会で今の仕事をみつけた。材料や資材の受け入れ、顧客の要望を社内ネット経由で営業担当に知らせるなど総務の仕事を分担している。

クリエすずき建設で週2日働く星野さん㊨と上司の竹内さん（千葉県柏市）

上司で総務部チームリーダーの竹内理恵さん（38）は「第一印象からポジティブ。年を重ねると頑固さが出る人もいるが、星野さんとは意思疎通がとても楽」と評価する。鈴木一功社長（40）も「基本能力の高い人。業務見直しでも自分から新フロー案を出してくれた」と満足そうだ。

窓口に相談する動機は報酬を得るためというのが目立つが、生きがいの場を求める声も多い。「孫に小遣いをやりたい」といった気持ちと、社会と関わりたい思いとが混じり合う。就労にとどまらず、ボランティアや趣味といった活動の情報も提供するのはこうしたニーズに対応するためだ。

大阪府豊中市では「とよなか生涯現役サポートセンター」が就労支援に軸足を置く形で活動中。「シニアのためのおしごとカフェ」で地元の中小企業とシニアを結びつけるほか、ダスキンなど特定企業の名を冠した仕事説明会も開く。

就労するシニアは年間100人強。運営に当たる協議会の山田幸敏事業統括員は「福祉・介護、清掃・警備、小売り・飲食、公園や道路の緑化作業の4分野の募集が多い」と話す。事務系や専門性が求められる仕事は少ないという。

こうした窓口をつくる自治体は早くからシニアの活動支援に動き出していたところが多い。柏市は市内団地の高齢化を見据え、10年ごろから東京大学との連携研究などに取り組んだ。豊中市も「以前からシニアや障害者の就労支援に蓄積があった」（山田統括員）。

シニアの活動というと、趣味のクラブやボランティアがまず思い浮かぶが、生涯現役窓口を通じて無理なく働ける先がみつかれば、人間関係を築きつつ収入を得る道が広がる。窓口は就労以外の活動の入り口にもなる。自治体としても地元企業の人材確保やシニアの健康づくりを期待できる。関係者それぞれに利点が見いだせそうだ。

（礒哲司）